２０１５／０９／２７　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：六つの封印を解く３
聖書箇所：ヨハネの黙示録　６章１２－１７節

黙示録６：１２－１７を学んでまいります。黙示録６章に入って、子羊であるイエス様が巻き物を受け取り、その封印が解かれて行く様子を見て来ました。それぞれの封印が解かれることによって、さまざまな出来事が起こることを我々はみことばを通して教えられました。

その出来事をもう一度思い出していただきたいのですが、一つ目の巻き物の封印が解かれた時、白い馬と騎手が記されていました。この地上に偽りの平和が訪れるという話でした。一時的な平和ですから、あっという間にその平和はなくなってしまいます。二頭目は赤い馬とそれに乗る騎手が記されていました。争いと戦争を表したものでした。平和がなくなり人々が互いに殺し合って行くことが約束されていました。また、三頭目は黒い馬と騎手で、飢餓の話でした。食べる物がなくなるという大変な時代が来ることが記されていました。そして四頭目は青ざめた馬と騎手、死の話でした。剣や飢餓また死病と獣によって人々が殺されるという話でした。全世界のかなりの数の人々が殺されることが確かに記されていました。そして第五番目の封印が解かれた時に、そこでは患難時代の殉教者たちの話が出て来ました。患難時代にイエス･キリストを信じる救いに与った人々の多くは殉教を経験します。殺されるわけです。この患難時代というのは、皆さんご存じのように、主イエス･キリストが我々クリスチャンを迎えに来てくださる空中携挙が終わった後始まります。大変な時代であることは想像がつきます。この世の中には大変な悪がはびこり悪が増大して行きます。

なぜ患難時代に入るとこのように大変な時代が訪れるのか――。パウロはその理由を教えてくれています。彼は、「**今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めている**」と、Ⅱテサロニケ２：６－７で教えています。つまり恵みの時代である今は、悪が支配し、悪が増大するのを聖霊なる神様が止めておられるけれども、空中携挙とともに聖霊が取り除かれることによって世の中はしたい放題、大変な悪がこの世の中を満たすということが約束されているというのです。

Ａ．「ヨハネが見たもの」　１２－１４節

さて、今この６章を通して五つの封印が解かれることを見て来ました。そこに記されていたさまざまな出来事は患難時代の前半の３年半に起こることであると言われます。きょう私たちが見る１２－１７節で、第６の封印が解かれます。これは恐らく前半の３年半の終わりごろに起こることであり、どうもそれで終わってしまうのではなくて、その後も最後のさばきが来るまでこういった現象が続くようです。１２節のみことばを見ていただくと、「**私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、**」、一体どういうことがこの地上において、この宇宙においてなされて行くのか、どういう出来事が起こるのか、今からご一緒に見て行きます。

◎　字義的か象徴的か

その前にここで神学者たちの間には一つ議論があります。この第六の封印が解かれた後に起こる出来事として、１７節に「**御怒りの大いなる日**」と書かれています。神様の怒りが地上に下る大変な時であるということが記されているわけですが、ここに記されていることを字義的に文字どおり取るべきなのか、それとも象徴的に取るべきなのかということです。結論的に言うと、私たちは字義的に、文字どおりに取って行きます。その理由を一つ挙げると、１２節のところからどういったことが起こるのかと記されていますが、それはここにだけ記されているのではなくて、実はこういったことをイエス様ご自身もお話になっておられるからです。主イエス・キリストが十字架に架かる前、オリーブ山において弟子たちはこの後、世の終わりにはどういうことが起こるのかという質問をしました。そしてイエス様はその話をされました。そこで今私たちが黙示録６章で見ていることが記されています。そこで、イエス様が言われたことは象徴的ではありませんでした。地震が起こると言ったら、本当に地震が起こる。そういうことから私たちはこの黙示録も同じように象徴的に見るのではなくて、字義的に文字どおり取るべきであると。

またヨハネが例えを使う場合、ここには「それは」というようなことばが記されています。「それは」であるとか、「～のように」とか、こういうことばを補うことによってこの部分が例えであるということを明らかにしています。ですからまず主イエス・キリストが言われたことが文字どおりであったことから、私たちもここに記されている出来事を文字どおりに理解するわけです。

一つだけ補足することがあります。皆さんにもヨハネの立場に立って想像していただきたいのですが、ヨハネはこれから起こる出来事を神様から２０００年前に知らされました。何が起こるかを見て、ヨハ

ネはそれを一生懸命記そうとするわけです。驚きの連続であったはずです。どう表現していいかわからなかったはずです。彼は一生懸命ことばを選んで、それを記すわけですが、確かに彼が見たこともない、経験したこともないことを記しているわけですから、誇張した表現があったり、象徴的に見えるような表現があることは事実です。きょう私たちが見て行くのもそういう表現が少し記されていることは確かです。しかし、私たちは字義的に、文字どおりこの箇所を取るべきです。１２節から記されている六つの出来事を今から見て行きたいと思います。

１．「大きな地震」　１２節

１２節「**小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。**」と、六つ目の封印が解かれた時に、大きな地震が起こったことが記されています。先ほどもお話ししたように、イエス様がオリーブ山で弟子たちにお話になった時もそのことに触れておられます。世の終わりの前には地震の回数が増えていくと。先ほどのマタイ２４：７にも「**方々にききんと地震が起こ**」ると言われているし、ルカ２１：１１にも「**大地震があり**」と記されています。人類はいろいろな地震を経験して来ました。私たちもいろいろな地震を目撃して来ました。今私たちの周りでも大変な地震が起こるということで注意を促しています。しかし、この箇所に記されている地震というのは、これまで人類が経験したことのないようなものです。しかも時代が進み、終わりが近づくにつれて、どうもその地震がますます大きくなって行くような記事があります。

イザヤ１３：１３に「**わたしは天を震わせる。万軍の主の憤りによって、その燃える怒りの日に、大地はその基から揺れ動く。**」とあります。基から大地が揺れ動く様子が記されています。また同じように旧約聖書の中でハガイ２：６－７にも「**:6 まことに、万軍の主はこう仰せられる。しばらくして、もう一度、わたしは天と地と、海と陸とを揺り動かす。:7 わたしは、すべての国々を揺り動かす。**」と。確かに我々はいろいろな地震を経験しましたが、ここで記されている地震というのは、この大地が揺れるだけではなく、天までも、この宇宙全体も震えるほどのものであるということが教えられています。大変な地震が起こるということです。黙示録１１：１３、黙示録１６：１８には「**いなずまと声と雷鳴があり、大きな地震があった。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほどに大きな、強い地震であった。**」とあります。だからまずヨハネが教えることは、第六の封印が解かれると大変な想定以上の地震がこの地上を襲うということです。そして終わりに近づくにつれて、それは一回ではなくて、どうも繰り返し起こって行くようです。それが一つ目の出来事です。

２．「太陽は毛の荒布のように黒くなる」　１２節

二つ目の出来事は１２節の続きに、「**そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、**」とあります。太陽が黒くなるということを例えで説明しています。「**毛の荒布**」というのは、黒いヤギの毛で織られた布です。非常に黒かった。人々は深い悲しみや絶望の中にある時に、この「**荒布**」を身にまとったのです。今、私たちは悲しみの時に黒い服を身につけますが、彼らも同じようにそういう時には黒いヤギの毛で編んだ衣服を身につけていた。それを例えに太陽が黒くなるのだと教えています。太陽が真っ暗になり、光が届かない状態です。

ここで何が言われているのかというと、先ほどの地震と全く関連のない話ではないのです。地震が起こるということは火山活動が活発になって来ます。火山の噴火があちこちに起こり、その噴煙が立ち上ることによって太陽の光がさえぎられて行く。つい最近も私たちは火山の噴火で多くの人が亡くなった出来事をテレビで見ました。すさまじい勢いで噴煙が立ち上ると、その下では太陽がうす暗く見え、周りが暗くなった様子を私たちは実際に目撃したわけです。ここに記されているのは、恐らくそういうことが起こるのだろうということです。

旧約聖書ヨエル２：３１には「**主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽はやみとなり、**」と記されています。そして、３０節にその原因が「**血と火と煙の柱である。**」と記されています。先ほどもお話しして来たように火山の噴火とともに、そこから出て来るマグマによって火を見ているし、煙も見ています。恐らくそれが太陽が闇となる原因だろうと。だから大変な火山活動によって太陽の光が届かないような状態になるというのが二つ目の現象だとヨハネは記しています。

３．「月の全面が血のようになった」　１２節

三つ目は、きょうのテキストに戻っていただいて「**月の全面が血のようになった。**」とあります。つまり太陽だけではなく月も暗くなるという話です。実は月が暗くなる、また月が血のような色になったというのは、神様のさばきと非常に関係しています。イザヤは１３：９－１１でこんなふうに言います。「**:9 見よ。主の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。:10 天の星、天のオリオン座は光を放たず、太陽は日の出から暗く、月も光を放たない。:11 わたしは、その悪のために世を罰し、その罪のために悪者を罰する。不遜な者の誇りをやめさせ、横暴な者の高ぶりを低くする。**」、神様のさばきが下るという話です。その時にはそういった天体が光を放たないという話です。そして先

ほど見たヨエル２：３１の後半の部分に「**主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽はやみとな**」るだけではなくて、「**月は血に変わる。**」と書いてあります。神の審判が下る前に神が罪人の罪をさばかれるその前に「**太陽はやみとなり、月は血に変わる。**」と。「**血に変わる**」というのは月の色が血の色、赤銅色になるということです。先ほども報告がありましたが、間もなく私たちはスーパームーンというものを目撃します。皆既月食が起こるわけです。月がまさに血の色のようになると。今はそれを楽しみにしていて、中継もなされるという話も聞いています。恐らくみんなが見て「すごいな、美しいな」と。でもこの時は違います。恐らくその出来事を目撃した多くの人々は、これは普通でないと感じて、恐れを抱くのです。そういったことが起こるということが黙示録に預言されています。

先ほどもお話ししたように、噴煙がそれぞれの火山から立ち上っている様子を思い出してください。昼間は太陽の光をさえぎり、夜は当然月が見えなくなります。ひょっとしたらそのことがヨハネによって１２節に記されていることかもしれません。いずれにしろそういったことがこの地上に起こるのだと。

４．「天の星が地上に落ちた」　１３節

そして第４番目の出来事は、１３節「**そして天の星が地上に落ちた。**」とあります。この「**星**」というのは太陽と月以外の天体です。そしてここには「**落ちた**」と書かれていますから、惑星や恒星が地球にぶつかって来ると見ることができるのですが、恐らくここで言っているのはそういうことではないでしょう。そんな大きな星が地球にぶつかったら地球はひとたまりもない。ではここで何を言わんとしているのか――。クリエーション・リサーチ研究所の創立者であり名誉学長であるヘンリー・モーリス博士がその答えをこんなふうに説明してくれています。「この箇所のことばは、一般的に今日流れ星と呼んでいる隕石以上のものであることを意味している」。つまりヨハネたちがいた今から２０００年前も彼らは流れ星を見ていたわけです。ここで言われているのは、その夜空に走る流れ星以上のものだと。では一体何かというと、恐らくこれらの流星は地球にぶつかる大流星雨であろうと。まさに雨のようにそれらが降り注いで来る、そういう出来事がここで記されているのだろうと。人によれば、１時間で大体１０００個以上の流星を見ることができたら、それを流星雨と呼ぶと。星のような大きなサイズではありませんが、大流星雨といったものが地球に無数にぶつかって来ると、全世界が大変な被害を受けることは間違いありません。そのことに関してヨハネはこんな例えを与えてくれています。１３節「**それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。**」と。まだ熟していないいちぢくの実を例えに使ってヨハネはその出来事を説明しています。まだ実が熟していない青い状態でも、余りにも強い風が吹いて来ると、それがぼとぼとぼとぼと落ちてしまう。まさにそれがヨハネが見た光景で、そういうことが起こるのだと記しているわけです。

５．「天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなる」　１３節

そして第５番目、１４節に「**天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、**」とあります。ヨハネがここで言わんとしている出来事を説明します。皆さんも想像力を働かせてください。両手に１枚の巻き物を持っているのです。巻き物というのは端が巻かれています。それを開いて読んでいる時に、ちょうどその真中が裂けるのです。巻き物を何年も何十年も使っていると、紙は古くなってもろくなってきます。でもずっと巻かれていたものを広げて見ていて、真ん中が裂けるとどうなるかというと、裂けた部分から両端の巻き物を持っている手の方にその紙は巻き上がって行きます。ヨハネはここでまさにそういう状態だと言っているのです。

イザヤもそのことについてイザヤ３４：４で「**天の万象は朽ち果て、天は巻き物のように巻かれる。**」と書いています。では、そうすると、何となく星空を見ていて、それがどこかを境にしてなくなってしまうという話がここでされているかというと、どうもそうではなさそうです。なぜかというと、神によって新天新地が創造されるまでまだこの天は残っています。黙示録２０：１１にも「**地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。**」、黙示録２１：１にも「**新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。**」とあります。つまり、最後の最後、神様がすべてを造り変えられて新しい天と新しい地をお造りになるまで、この古い天と古い地はまだ残っているのです。ですから、まさに天が「**巻き物が巻かれるように**」消えてなくなるとここでヨハネが言うのは、この天が滅ぼされてしまう、消えてなくなってしまうということではないということがわかります。

では一体何を言っているのか――。それを理解するために必要なのは、１４節に出て来る「**消えてなくなり**」ということばの意味です。このことばの意味は字義的に、文字どおり言えば、もう見ることができないということです。もっと言えば、普段の場所から移されるという意味を持ったことばです。恐らく星を見た時に、普段あるところから移動してしまうということです。そういうことが起こるということです。ずっと見続けてきたこの宇宙が壊れて行く様子です。確かに主イエス･キリストによってもそのことが語られています。ルカ２１：１１に「**天からのすさまじい前兆が現われ**」ると言われているし、Ⅱペテロ３：１０でペテロは「**その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地**

のいろいろなわざは焼き尽くされます。」と記されています。恐らく今見て来たようにこの最後の時に今あった場所から移動してしまう、そういうことが起こると。

６．「すべての山や島がその場所から移された」　１４節

そして、最後の第六番目の出来事が１４節後半に「**すべての山や島がその場所から移された。**」と出て来ます。きょう私たちが順番に見て来たことを思い出してください。ちょうど患難時代の３年半が終わりかけようとしているころです。この地上と宇宙にどういったことが起こるのか――。大変な地震が起こり、太陽が光を失い、月が血の色になってしまう。火山の影響がそこにあるのでしょう。しかし、同時にそのような血の色に変わるということは神のさばきがまさに来ようとしていることを告げるわけです。そして、その天の星、恐らく大流星雨がこの地球上にぶつかって来る。大変なダメージをこの地球上にもたらす。そしてその天の星があった場所から移動してしまうような出来事が起こってくると。そして最後に「**すべての山や島がその場所から移された**」と記されています。恐らくそれは地震等による地殻変動の話でしょう。今も我々はそのことを見ています。あの東日本大震災によって、地球が、日本列島が動いている様子を我々はニュースで知っています。またいろいろな地殻変動が起こっています。山が沈んでしまったり、また新しい島ができたり、恐らくそういうことが起こるということがここに記されていることでしょう。これが第六の封印が解かれた時に起こる出来事としてヨハネが記したことです。

Ｂ．「人々の反応」　１５－１７節

１．例外のないさばき

そういったことが起こっているにもかかわらず、人々はどういう反応をするかです。彼らは驚くべき反応をするのです。１５－１７節に記されていることは、神様のさばきです。今我々が見て来たのもそのことを指さしていたのです。そのすべての出来事が私たちに教えてくれていることは、神の約束された罪のさばきがやって来るということです。

１５節には、この地上にあって社会を構成する人たちすべてがリストアップされています。

①　「地上の王」

最初に「**地上の王**」と出て来ます。これは世界のリーダーたちの話です。最高の統治者や君主、支配者また国家の長たち、国を治めている人たちです。

②　「高官」

二つ目は「**高官**」と出て来ます。これは政府の高官、王宮の高官とも言えます。実際政府の行政上の務めを履行する責任を持った人々。そういう人たちが当然すべての国にはいます。行政を司っている人たちです。

③　「千人隊長」

次に出て来るのは「**千人隊長**」です。軍の司令官たち、軍のトップです。

④　「金持ち」

次に出て来るのは「**金持ち**」です。これは個人的にではなく、商業や経済を操るリーダーたちです。この世界の経済を操っている人たち、もちろん国の経済を操っている人たちもそこには含まれるでしょう。

⑤「勇者」

最後に出て来るのは「**勇者**」です。このことばの意味は、人々に対して巨大な影響力を持っている人々です。いろいろな世界にいるじゃないですか。スターであったり、ヒーローであったり、彼らが何かを言ったり、何かをするとすごい影響を及ぼす人たちのことでしょう。

この五つのリストの人たちは、この世では要人と呼ばれているかもしれないし、非常に重要な人物と言われているかもしれない。でもみことばは、たとえそうであったとしても罪のさばきを免れることはできないと教えているのです。彼らは地位も権力も欲しいままにしている人々です。でも彼らもこのさばきを逃れることはできない。

⑥　「あらゆる奴隷と自由人」

その後、一般の人々が出て来ます。「**あらゆる奴隷と自由人**」と書かれています。このリストに書かれていない、すべての残った人たちです。こういうリストを挙げることによって、神のさばきには不公平はない、神のさばきはすべての人に及ぶ、すべての罪人がこのさばきを受けるのだと教えています。なぜか――。私たちの神はすべてにおいて完全にきよい方であって、罪を憎んでおられる方だから、必ずその日が来ると。見て来たように、いろいろなことが起こって来ます。それは神のさばきが必ず下ることの前触れです。まさに神のさばきが来ることの警鐘が鳴らされているのです。

２．人の罪

①　「人間的な解決を求める」　１５節

さて、その中にあって、人々がどのような反応をしているのかを見てください。１５節「**地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、**」と書いてあります。彼らは神

様が下されるさばきから逃れようとしているのです。確かに患難時代において神がなさることは、大変恐ろしいことです。でも一番恐ろしいと思うのは、神の警鐘を聞きながら、どういうことが起こるのか預言されていたことが実際に自分たちの目の前で起こり、その出来事を目撃していながら人々は普段どおりの生活をするのです。今見て来たように地震が起こり、この宇宙に、この天体に異変が起こり、今までになかったようなことが起こるのです。神のさばきが近いことを神は示しておられるにもかかわらず、人間はいつもと変わらない生活をするのです。マタイ２４：３７－３８に「**人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。:38 洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。**」とあります。つまり普段の生活を行なっていたのです。あのノアの洪水が起こるその日まで、ノアとその家族が箱舟に入ってその扉が閉じられて、雨が降って洪水が起こる、その間際まで、ノアは１２０年間ずっとさばきが来ることを語り続けていました。それにもかかわらず、彼らは心を開こうとせず、最後の最後までその神の警告を全く無視して、好きなように生きているのです。神のさばきは必ず下るのです。皆さんはそのことを何度も学んでおられるから、もう確信として持っておられると思います。それはだれかから聞いた確信ではなくて、聖書が確かに教えているからです。

旧約聖書ナホム書１：３－７、神のメッセージを聞いてください。「**主は怒るのにおそく、力強い。主は決して罰せずにおくことはしない方。**」と書いてあります。最後の部分を見てください。「**主は決して罰せずにおくことはしない方。**」と日本語訳はされています。これはヘブライ語ですが、この箇所はこんなことばがこんなふうに並んでいます。順番に読んで行くと、「罰せられないこと、いいえ、罰せられないこと、主は。」と、四つのことばが並んでいます。「罰せられないこと」と同じことばが２回ここに出て来るのです。つまり主がこのことを通して何を言われているかというと、主は絶対に罪を罰せられるのだということを強調しているのです。神様は罪を見て見ないふりをしたり、忘れようとしたりする神ではないと言うのです。私たち人間が犯した罪に関しては、絶対に、絶対に、その罪をさばかれる。それがこのメッセージです。神様は優しい方だからそんなことは全部赦してくださるのではないか――。いいえ神はきよい方であり、正しい方であり、どんな小さな罪でも見逃すことをなさらない方です。それがここに書いてあります。主は絶対に罪を罰せられる方、必ず罪をさばかれることを強調して教えられています。

英語の聖書を見ると、ここに「罪を犯した人を」ということばを加えて、だれをさばくのかメッセージを明確にしています。罪を犯した人々です。それがこのナホム１：３で神が言われていることです。罪は絶対にさばくということです。あなたがそれを否定しようとどうしようと神がそのことを明確に言われている。聖書を通してそのことが記されているのです。

今お読みした３節を口語訳聖書は「**主は罰すべき者を決してゆるされない者**」と訳しています。非常にわかりやすいメッセージです。罪を犯している者を絶対に赦すことのない方だ、それでいて、ナホム１：７を見ると、「**主はいつくしみ深く、苦難の日のとりでである。主に身を避ける者たちを主は知っておられる。**」と。確かに神はきよい正しい方で、人間の罪を必ず、絶対にさばく。しかしそれでいて神はあわれみに満ちたお方であって、主の前に助けを求めて来る者たち、主の前に救いを求めて出て来る者たちを赦される方だ。それが神だと言うのです。私たちはそのあわれみによって救われました。私たちの行ないではない、神があなたをあわれみ、そしてあなたを救ってくださった。ですから確かにさばきがあると教えていながら、同時にそこに救いがあることも教えています。

②　「悔い改めをしない」　１６節

きょうのテキストに戻ってみてください。神のさばきが近づいているのです。そうすると、この神の赦しをいただいていない人、罪の赦しをいただいていない人は「**ほら穴と山の岩間に隠れ**」て、何とかこのさばきから逃れようとするのです。そんなことはできっこない。そしてそれでいて彼らは１６節「**山や岩に向かってこう言った。『私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。**」と言うのです。彼らはこの祈りを神に対してではなく、「**山や岩に向かって**」したのです。彼らは自然界に対して祈っているのです。自然界に助けを求めているのです。彼らは神のさばきが近いことを知っています。神にお会いして、神の前で自分のすべての罪がさばかれることを恐れているのです。そのことは確実に起こることです。そこで彼らはこの神から隠れて、死を望んでいるのです。死んだらそのさばきを逃れることができるしょうと。ですからこの自然界に、山とか岩に向かって、私たちのうちに倒れかかって私たちに死を与えてくれ、そうすれば我々は神の前に立って、この罪のさばきを受けることから逃れることができるからと。愚かでしょう。たとえ肉体的な死を経験したとしても、魂は生き続けています。みんな神の前に立つのです。それを逃れることはできないのです。でもこの人たちは、死を経験すれば、主の前のさばきを逃れることができるのではないかと思ったのです。そして彼らはそのことを自然界に願っているのです。なぜ赦してくださる神のところに救いを求めて行かないのかです。

結論：

１７節に「**御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。**」とあります。答えは簡単です。だれも耐えることができないと。この「**耐え**」るということばは立つという意味があります。つまり我々のうちだれがこのきよく、何一つ汚れのない神の前に立つことだできるのか――。このきよい神の前に立つことができるほどきよく汚れのない者はだれもいないと。感謝なことに、神があなたの罪をきよめることによって神の前に立たせてくださる。私たちの努力では不可能です。この日が来ると言っています。みことばは繰り返し、盗人のようにその日がやって来ると。だれもその日がわからないと。泥棒が入って来るように、思いがけない時にそれがやって来ると。その警告を与えています。だからしっかりその備えをなすことです。

クリスチャンの皆さん、きょう私たちが見て来たこの警告は、あなたに対する警告ではないことをぜひ覚えておいてください。なぜかというと、あなたはもう救い出されたのです。ここに記されている罪のさばきはあなたの話ではない。あなたはもうその罪が赦されて、神の子どもとされて新しく生まれ変わったからです。しかし、主に会う備えをもって生きることの必要性は変わらないのです。何となく、自分の思いどおりに毎日を過ごしていませんか？救いに与った私たちはこの神の前にどのように生きるのか教えられています。神様が喜ばれることをしっかりすることです。神の助けをいただきながら、そのことを継続して行ない続けることです。失敗したら悔い改めてそれを行ない続けることです。それは救いを得るためではない。救われた人はそうやって生きるのです。そういう願いを神様は私たちに下さるし、それを実践するための助けを与え続けてくださる。我々はイエス様にお会いするその日まで、そうやって生き続けることです。そうして私たちはこの神の救いが本物であり、この神が本当の神であることを明らかにするのです。主は皆さんを助けてくださることを知っています。助けを求めながら生きて行くのです。

もしまだ自分の救いがはっきりしていない人がいるなら、神はあなたに救いのチャンスを与えてくださっている。神の前に立つことができる者にあなたを生まれ変わらせてくださる。さばきを受けるかもしれない。罪赦されて、この祝福の中に招かれます。でもそのためには、あなた自身の罪が赦されることが必要です。この患難時代の多くの人たちは、神のところに救いを求めて行かなかったことをみことばは教えます。自分たちで何とかしようとしたのです。その結果、彼らは永遠の滅び、永遠の地獄です。あなたがそのさばきを受けないように、あなたが永遠の地獄に行かないことを心から願います。ただ唯一の道は、あわれみ深い神があなたに赦しを与えてくださるという、我々人間にとって最もすばらしいこの知らせを受け入れることです。この主の前に心を開いてこの救いをいただくことです。彼らに必要だったのはそのことでした。あなたはこの救いに与っているのか、まだ与っていないのかどちらかに属します。今からどのような歩みをして行くか――。それは救われていようとそうでなかろうと変わりません。どんな選択をするかはあなたの責任です。どうぞ主の前に正しい選択をして、正しい歩みをしてください。その時に主はあなたを祝し、そしてあなたを喜んでくださる。正しい選択をもってこの主に従って行かれることを心からお勧めします。

《考えましょう》

１．患難時代の後半に起こる６つの出来事を記してください。
２．どうしてこれらの出来事を字義どおりに取るべきなのでしょうか？
３．いつこのさばきは下るのでしょう？
４．どうして人は主に罪の赦しを求めないのでしょう？